



# なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.41

## 律令の重い税と過酷な使役にあえぐ民衆

### 平城京の建設工事から逃げる民衆

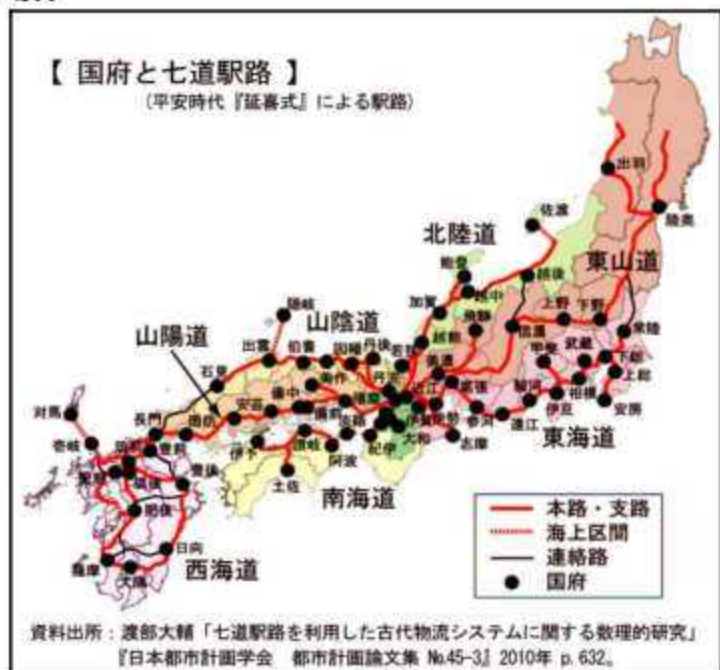
平城京造営では、畿内や畿外から多くの人々が雇役として集められた。雇役は、税の雑徭とは異なり、日当として銭1文が支払われた。和銅4年(711年)5月15日に朝廷は、銭1文は粳6升に相当すると定めた<sup>\*1</sup>。農民が1日3合の米すら食べることの出来なかった時代に、平城京造営の仕事は1日働けば粳6升もらえる高い賃金だった。

しかし、平城京造営の雇役で働く民衆の逃亡が相次いだ。和銅4年(711年)9月4日に元明天皇の詔(みことり)が出された。「近頃つぎのようなことを聞く。諸国からの役民が、造都の労役に疲れて、逃亡する者がやはり多い。禁止しようとしても止まらない。現在平城宮の垣は未完成で、防衛が不十分である。とりあえず衛兵所を建てて、兵器庫を固く守るべきである(後略)」<sup>\*2</sup>。過酷な労働の様子が伝わってくる。

### 命がけだった納税(調・庸)の旅

全国から平城京(奈良)に調・庸の品物が駅路を使って運ばれた。

調・庸を村人全員で品物を運んだのではない。実際には村の中から一部の人たちが運んだ。その人たちは運脚と呼ばれた。村人たちは運脚に旅の費用として米や塩などを出した。地方から都までは国司が引率することになっていたの  
で、運脚の人たちは無事に都にたどり着けた。運脚の人たちは都の造営工事でも働かされた。しかし、帰りは運脚の人たちは自分たちだけで歩くことになった。奈良から遠く離れた故郷にたどり着けずに途中で命を落とす人たちが多かった。そのことで、何度も詔が出ている。



\*1 宇治谷孟『続日本紀(上)全現代語訳』講談社学術文庫 1992年 p.121。

\*2 前掲、宇治谷孟『続日本紀(上)全現代語訳』p.124。

和銅5年(712年)正月16日、元明天皇は次のような詔を出した。「諸国の役民(税を都まで運んだ人たちが)郷里に還る日に、食糧が欠乏し、多く帰路で飢えて、溝や谷に転落し、埋もれ死んでいるといったことが少なくない。国司らはよく気をつけて慈しみ養い、程度に応じて物を恵み与えるように。もし死に至る者があれば、とりあえず埋葬し、その姓名を記録して本人の戸籍のある国に報告せよ。」<sup>3</sup>

同年10月29日、元明天皇は詔を再度出した。「諸国の労役の人夫と運脚(調・庸の物を運ぶ)が、郷里へ帰る日、食糧が欠乏して調達することが難しい。そこで群稲から稲を支出して便利な所に用意しておき、役夫が到着したら、自由に買えるようにせよ。また旅行する人は、必ず銭を持って費用とし、重い所持品のために苦勞することのないように。そして銭を使用することの、便利なことを知らせよ。」<sup>4</sup>

しかし、都(平城京)から離れた地では、銭(和同開珎)は通用しなかった。米や麻布などが依然として通貨の役割を果たしていたのである。そのために、銭を持っていたとしても食料を買えずに飢え死にする運脚たちが出たようである。

元明天皇は、重ねて銭を使うよう詔を出している。和銅6年(713年)3月19日の詔に「諸国の地は、河や山によって遠く隔てられ、貢納(貢ぎ物のこと)数量が欠けることになり、重い荷を減らそうとすると、道中での飢えが少なくないことを恐れる。

#### 【調・庸などの運搬日数】



そこで各自一袋の銭を持ち、道中で炉のある場所で、食事をする時の用に充てれば、労役の費(費用のこと)を省き、往き来の便が増すだろう。国司や郡司たる者は、富豪の者から募って米を路傍(みちばた)に用意し、その売買を行わせよ。(後略)」<sup>5</sup>として、繰り返し銭の使用を命じ、銭を使用しない者には罰則を与えるとまで定めた。

## ついに故郷の農村から逃亡する農民が増える

やがて、農村から逃亡し、口分田を捨てる農民が多くなっていく。元明天皇は霊龜元年(715年)に勅を次のように出した。「天下の人民の多くは、その本籍地を離れ他郷に流浪して、課役(ぜい)をたくみに忌避している(のがれている)。そのように浮浪して逗留(とどまっていること)が三ヶ月以上になる者は、現地で戸籍に登録し、調・庸を輸納(おさめさせること)させることは、その国の法に従わせよ(後略)」<sup>6</sup>。

<sup>3</sup> 前掲、宇治谷孟『続日本紀(上)全現代語訳』pp.127-128。

<sup>4</sup> 前掲、宇治谷孟『続日本紀(上)全現代語訳』p.135。

<sup>5</sup> 前掲、宇治谷孟『続日本紀(上)全現代語訳』p.138。

<sup>6</sup> 前掲、宇治谷孟『続日本紀(上)全現代語訳』p.158。